

招聘 研究員

氏名	金 鎮星 (KIM Jinsung)
所属機関等	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科
受入期間	2016年12月7日～2016年12月23日
指導教員	孫 安石 (チューター：李 美大一・姜 明采)
研究課題	19世紀の韓日国際関係



二項対立を超えて—韓国の「近代化」と植民地化に対する新しいアプローチの提言

金 鎮星

韓日関係は両国の歴史学において最も重要な研究テーマの一つになっている。特に近代期における「近代性」と植民地主義の問題は、この研究分野において現在も注目される論点となっている。韓国の学界では簡潔にまとめると植民地時代に関して二つの見方がある。つまり「内在的発展論」と「植民地近代化論」である。前者は外の影響を受けない韓国独自の「近代化」の可能性を重視する考えであるのに対し、後者は韓国の「近代化」について植民地支配下で日本政府が果たした役割とその遺産に注目する立場である。二つの研究方向において各歴史学者の日本に対する見解は異なっている。内在的発展論の立場をとる研究者たちは、日本を韓国社会の発展を妨げる障害として捉えている。より具体的にいえば、日本政府は韓国人を不当に利用するばかりで、韓国の発展を抑制していたというのがこうした研究者たちの考えである。対照的に植民地近代化論の研究者は、日本による韓国の植民地支配はその当時に韓国人に利益をもたらしただけでなく、独立後に韓国の「近代化」の基盤ともなったと主張する。

双方の研究者たちが韓国の歴史学に多大な貢献を果たしてきたが、私の見解ではどちらの主張にも共通するいくつかの限界があると思う。第一に「近代性」または「近代主義」の定義があいまいな点である。実際この問題については一致した見解が存在していない。このあいまいさが原因で、我々にとって近代の特性が把握しにくいものになっている。私見ではあるが、近代性について疑問を投げかけ定義しようとする韓国の歴史学者は数多くいるが、この問題は依然として未解決のままである。

次に歴史叙述において研究範囲が一国つまり韓国に限定されている点である。韓国の学界が、全てではないにしても他の地域の学者とコミュニケーションを図るのに苦労していることから、こうした傾向の研究の限界が明らかになっている。そして最後に重要な点だが、韓国史に対する民族主義的アプローチが韓国の歴史学における多様な側面を覆い隠している。言い換えれば、研究テーマが大日本帝国に対する独立運動や抵抗運動ばかりに集中している。

既存の歴史学者は特定の分野にかたよっているものの、それとは異なる視点から研究を進める必要がある。実際のところ、上記二派の学者たちは「近代化」の概念を共有しているといえる。これらの学者たちが考える「近代化」は現代の国家の核となる要素であり、人類にとっての「善」、韓国人が達成すべき目標である。この意味では、双方の学者たちは全く同じではないものの非常に類似していると言っても過言ではない。このような状況では近代性の概念を定義する必要性に加えて、「近代化」の特性を熟考する必要がある。近代化のプロセスでは、多くの下層階級の人々の犠牲や関与が求められた。しかし歴史学者の多くは著名な政治家、抵抗運動家、実業家といった少数の人々にだけ注意を払ってきた。このため、大部分の一般人の生活が無意識のうちに近代史叙述から排除されてしまっている。この問題に取り組むうえでは二つの課題がある。つまり光と影を等しく調査しなければならないのである。さらに、難しい面はあるが今後の研究テーマとして一般人の生活を取り上げる必要がある。





●写真1 皇居



●写真2 国立公文書館

前述した通り、韓国の多くの歴史学者は研究において韓国社会にのみ焦点を当てる傾向がある。私見ではこうした方法論は「近代」韓国の状況を解釈するうえで十分ではない。韓国の「近代性」の性質を明らかにするには、日本、中国、インドといった他国のケースと比較する必要がある。特に日本の状況との比較は韓国社会を説明することにつながるだろう。韓国の特性に注目することは重要であるが、他のケースを考慮することによって韓国史の理解が深まるのである。研究者にとっては複数の言語をマスターするだけでなく、各国の歴史を調査しなければならないため、こうした研究は明らかに困難な作業になる。しかしこのような比較アプローチは、韓国、日本の歴史を世界史の一部として理解するために非常に重要である。

韓国の近代史は日本との間での戦いの連続であったというのは事実である。多くの韓国人独立運動家が海外で大韓民国臨時政府を設立したり、日本の要人を暗殺したりすることで韓国内の不法な植民地体制に抵抗した。民族主義的アプローチがこれまで調査してきたのはこうした側面であり、この手法のおかげで多くの歴史学者たちは近代史における独立運動を詳細に把握することができた。しかし、この時期を他の側面から観察することも非常に重要である。韓国と日本の間には無慈悲で敵対的な関係しかなかったのか。両国は一方的に影響を及ぼしていたのか。韓国の「近代化」の失敗は日本の妨害による結果なのか。韓国政府にこの失敗の原因はないのか。独立運動に参加していなかった大半の人々の生活はどのようなものだったか。こうした多くの疑問を解き明かすには、民族主義的な歴史叙述の限界を乗り越えることによるのみ可能である。

こうした意味において自分にとって1880年代は短期研究の対象として魅力的に感じられる。この期間に韓国政府は「近代化」政策を自主的に実施しており、その試みは失敗に終わっている。この失敗の原因を明らかにす

るためには、朝鮮王朝と中央官界の活動を調査する必要がある。1876年の韓国開国と1910年の植民地化の始まりをつなぐ時期として重要であるにもかかわらず、この時代にスポットライトを当てている学者はほとんどいない。この時期を研究することで、植民地化の原因と影響をより明確に説明できるようになる。

この時期の韓国と日本の「近代化」プロセスを比較することで、それぞれの特異性を体系的に明らかにすることが可能である。例えば、中央政府に対して反乱を起こした農民軍が1895年に正規兵を打ち負かしたことで韓国政府は近代化を達成できなかった。この事件は韓国の「近代化」プロセスの失敗を意味する象徴的な重要性を持つ出来事である。政府による軍備、経済分野への投資にもかかわらず、その努力は実を結ばなかった。対照的に日本政府は近代化に成功し、明治政府は1877年に西南戦争で西郷隆盛が率いる反乱を鎮めた。日本としての成功もしくは明治維新の成功と韓国の「近代化」の失敗は両極端の結果を見せ、両国の運命を決定付けた。

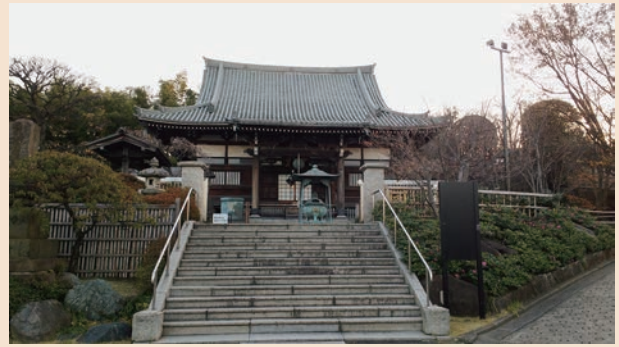
私の長期的な研究としては、歴史叙述から排除されてきた一般人の生活を解明したいと考えている。一般人は「近代化」プロセスをどのように認識し、このプロセスにどう反応したのか。近代化は一般人にとってどのような意味を持っていたか。一般人の生活に利益をもたらすものであったか。さもなければ、一般人の日常生活に悪影響をもたらしたか。データが欠如しているため、一般人の生活や考えを調査するのは極めて困難である。しかしながら、こうした調査は大多数の人たちの生活を明らかにするという点で重要な課題である。政治的、体系的、経済的な歴史を超えて、歴史学者は新しい分野を開拓する必要がある。こうしたあらゆる点を考慮すると、1880年代の研究は韓国人が「近代化」をどのように理解していたかを解明するのに役立つ可能性がある。

私の研究にとって非文字資料研究センター、日本常民文化研究所、神奈川大学は理想的な環境を有している。





●写真3 孝道山



●写真4 妙蓮寺

カナダ・ブリティッシュコロンビア大学（UBC）アジア学科からの招聘研究員として、私は上記三つの機関を訪れる機会に恵まれた。非文字資料研究センターでの主要な研究テーマの一つが日本内外での居留地の問題である。外国勢力が駐屯する居留地は、帝国主義を媒介する役割を担っていた。しかし、居留地にはもう一つの重要な側面があり、文化交流や通商活動の窓口としての役目も果たしていたのである。つまり、居留地の研究によって「近代性」と植民地主義をより深く理解することが可能になる。同センターにおいて、私は歴史データを収集し、以前の研究成果の参考文献一覧を作成することができた。実際、カナダでは情報がなく資金が限られているため、こうした出版物を入手するのは極めて困難である。加えて同センターの図像目録において居留地の画像を見ることができた。居留地や東アジア地域内の相互関係についての本や図像目録を調べることで、この分野の重要性と幅広さを実感することができた。さらに方法論という点では、非文字資料研究センターはインスピレーションを与えてくれる場所である。その名前が象徴するように同センターは非文字データを収集しており、主に文書データに依存しがちな通常の歴史学者の方向性とは異なっている。非文字資料の活用は、歴史分野を広げるきっかけとなり得る。

同センターに加え、日本常民文化研究所は常民に関する研究を専門とするセンターである。私の研究テーマの一つが19世紀後半の一般人の生活に関連しているため、同センターとの学术交流は非常に有益である。実はこのセンターの存在はカナダの学者の間ではあまり知られていない。日本常民文化研究所を訪れる機会に恵まれたことは、私にとっては大きなプラスとなった。私の指導教員であるホ・ナムリン（許南麟）教授は約20年前にこのセンターの研究員の一人であった。こうした関係がなければ、同センターの学者と会い、歴史資料に触れる機会はなかっただろう。同センターの資料という点で

は韓国語における日本の政策に関する書籍類が最も重要な資料であった。カナダではこうした原本を見つけるのは非常に難しいからである。

そして神奈川大学図書館は日本の近代史に関する貴重な発見にあふれた場所である。同図書館には東アジアに関する歴史、政治、経済の蔵書が多数所蔵されている。より具体的にいうと、韓日国際関係に関する蔵書に図書館の大きなスペースが割かれている。中でも、寺内正毅関係文書や齋藤実文書といった歴史資料をカナダで入手することは極めて難しい。そのためこうした文書の実物を読むことができたのは、とてもうれしい体験であった。実のところUBCアジア図書館の司書は近代日本史に関連する参考文献や歴史データを収集するのに全力を尽くしてくれた。それでもカナダ以外のすべての研究文献を網羅することは不可能である。このため、研究者からの指摘や要望はアジア図書館の運営のためにとても重要である。日本で私が作成したリストは、アジア図書館の参考文献を拡充するのに役立つと思われる。

歴史学では文献での研究と現地調査の両方が重要である。現地への訪問なくしては、学者は研究テーマを表面的にしか理解することができない。日本を理解するためには、日本の史跡を訪問することが重要である。このためスケジュールが詰まっていたにもかかわらず、私は東京を訪問する時間を作った。実際東京には日本の近代史に関わる史跡が数多く存在する。例えば、皇居は天皇や主要な政治家たちが重大な決断を下した場所である。さらに靖国神社の問題は、日本と東アジア諸国の関係において議論を呼ぶ政治問題となっている。日本の右翼の考え方を理解しない限り、日本社会を理解するとはいえない。靖国神社訪問は、右翼グループを理解する貴重な機会となった。さらに加えると、日本の学界は世界的に有名なアーカイブスから大きな恩恵を受けている。外務省外交史料館と国立公文書館は日本における優れた公文書館の典型である。これらの施設を訪問することで、



そのしくみや組織に関する知識を得ることができた。

非文字資料研究センターと日本常民文化研究所を訪問できたことは、間違いなく個人的に大きな成果であっ

た。今回の研究訪問を通じて史料の原本と史跡に直接触れることができた。神奈川大学とUBCとの学术交流は互いの研究に資するものである。

Beyond Dichotomy: the Suggestion for the New Approach to Korea's "Modernization" and Colonization

The University of British Columbia Jinsung Kim

The relation between Korea and Japan has been one of the most crucial research topics in historiography of both states. Especially, the problem of "modernity" and colonialism during the modern period is an ongoing issue in this field. In Korean academia, simply put, there are two major opinions in terms of the colonial period: the Internal Development Theory (内在的發展論) and the Theory of Colonial Modernization (植民地近代化論). The former emphasizes the likelihood of independent "modernization" of Korea whereas the latter pays attention to the role that the Japanese government played under the colonial rule and its legacy in terms of Korean "modernization". In these research trends, individual historians differ in the opinions about Japan. The researchers arguing for the Internal Development Theory consider Japan as an obstacle to progress of the Korean society. To be specific, the Japanese government merely exploited Koreans and kept the development of Korea in check according to the scholars. In contrast, the counterparts maintain that the colonial rule of Japan over Korea offered Korean not only benefits during the period but also the foundation of Korean "modernization" after the independence.

Although two kinds of scholars have made an enormous contribution to Korean historiography there are several limits in common from my point of view. Above all, the definition of "modernity" or "modernism" is still ambiguous. In fact, there is not any agreement regarding this issue. This ambiguity makes it difficult for us to grasp the character of the modern period. In my opinion, many Korean historians are posing a question about modernity and attempting to define it, but it remains unsolved so far. In addition, the research scope is considerably confined to one nation, or Korea, in the narration. The limitation of this tendency is obvious in that the Korean academia have trouble in communicating with scholars in

other regions, if not entirely. Last but not least, the nationalistic approach to Korean history has obscured diverse aspects in Korean historiography. In other words, the research themes have predominantly concentrated on the independent movement and resistance against the Japanese empire.

Despite the devotion of the existent historians, it is required to conduct research from a different perspective. As a matter of fact, two kinds of scholars share the notion of "modernization". For them, "modernization" is a core element of a contemporary nation, "the good" to human beings, and a goal that Koreans should accomplish. In this sense, it is not exaggeration that they are very similar, if not the same. In this situation, aside from the necessity of defining the notion of modernity, it is needed to contemplate the trait of "modernization". This process demanded sacrifice and commitment of many subalterns, or people of lower class. However, many historians have just paid attention to small number of people, including prominent politicians, resisters, or businessmen. By doing this, the lives of a majority of common people are unconsciously excluded in the narration of modern history. There are two tasks in order to address this issue; the light and shade should be equally investigated. Moreover, the life of common people should be the subject of future research in spite of its difficulty.

As aforementioned, many historians in Korea tend to just focus on Korean society in doing their research. From my point of view, this methodology is not sufficient to explain the situation of "modern" Korea. In order to clarify the character of Korean "modernity", it is necessary to compare with other cases, such as Japan, China, or India. In particular, comparison and contrast with Japan's circumstance will be very conducive to illuminating Korean society. The emphasis on Korean peculiarity is



crucial, yet taking other cases into account can deepen the understating of Korean history. This is an obviously daunting task because it requires scholars not only to master several languages but also to investigate history of individual countries. However, this comparative approach is very crucial to make Korean and Japanese history as part of world history.

It is true that the modern history of Korea was the series of struggles between Korea and Japan. Many Korean independence activists resisted the unlawful colonial regime in Korea by establishing the provisional government overseas or assassinating Japanese leading figures. The nationalistic approach has probed this aspect so far, and in virtue of this methodology, many historians were able to reveal the independent movement in modern history more clearly. However, it is also very significant to observe other aspects. Was the relationship between Korea and Japan just harsh and hostile? Did they affect each other merely unilaterally? Did the failure of “modernization” of Korea result from the interruption of Japan? Was not the Korean government responsible for its failure? How was the life of a majority of people who did not participate in the independence movement? These many questions can be solved only when we overcome the limits of the nationalistic narration.

In this sense, the period of 1880s is fascinating to me as a short-term project. This is the era that the Korean government conducted its “modernization” project independently, which resulted in failure. It is necessary for us to investigate the activities of the Korean court and central officialdom in order to reveal the cause of this failure. In spite of the importance of this era as a bridge between the opening of Korea in 1876 and the outset of its colonization in 1910, few scholars have focused a spotlight on this era. By looking into this period, we can explain the cause and effect of colonization more evidently.

Comparison between the “modernization” processes of Korea and Japan in this era will enable us to clarify the peculiarities of each state in a systematic way. For example, the Korean government failed its modernization when the irregular peasant army, which rebelled against the Korean central government, defeated the regular army in 1895. This incident is of symbolic significance since it marked the fiasco of the Korean “modernization” process. Despite the governmental investment in the military and economic fields, the efforts were fruitless. In contrast, the Japanese government successfully achieved

the project, and the Meiji government put down the Satsuma Rebellion (西南戦争) led by Saigo Takamori (西郷隆盛) in 1877. The success of Japan, or the Meiji Reform, and the failure of Korean “modernization” show the extreme difference, which determined the fate of these states.

As a long-term project, I would like to shed light on the life of common people that have been excluded from the historical narration as well. How did they recognize the process of “modernization” and react to this process? What did it mean to them? Was it beneficial to their life? Otherwise, did it have a negative influence on their daily life? Due to lack of data, it is very challenging to examine their lives and thoughts. Nonetheless, it is a crucial task in that it can reveal lives of a majority of people. Beyond the political, systematic, or economic history, historians need to pioneer the new fields. All things considered, the research on 1880s can help us comprehend how Koreans understand “modernity”.

The Research Center for Nonwritten Cultural Materials, the Institute for the Study of Japanese Folk Culture, and Kanagawa University have an ideal environment for my research. As a visiting researcher from the Department of Asian Studies at the University of British Columbia (UBC) in Canada, I had an opportunity to visit these three centers. One of the main subjects of the Research Center for Nonwritten Cultural Materials is the problem of settlements in and outside Japan. As a garrison of foreign powers, settlements played a role as an agent of imperialism. But, another important aspect of the regions is the fact that it also acted as a window of cultural exchange and trading activities. Therefore, the studies on settlements make it possible for us to better understand “modernity” and colonialism. In this center, I was able to collect historical data and make a bibliography of the previous research achievements. In fact, gaining these publications in Canada is a very hard task because of lack of information and the limit of funding. Moreover, visual catalogues in this center provided me with visual images of the settlements. Reading the books and visual catalogues about settlements and the interrelationship in East Asia, I realized how significant and broad this field is. Furthermore, in terms of methodology, Research Center for Nonwritten Cultural Materials is very inspirational. As its name stands for, this center has gleaned the non-written data so far unlike the tendency of ordinary historians who mainly rely on written data. Utilization of



non-written materials can be a catalyst to broaden the field of history.

On top of that, Institute for the Study of Japanese Folk Culture is specialized in research on the area of common people (常民). Since one of my research interests is associated with the life of publics in the late 19th century, academic communication with this center is very valuable. In truth, this center is not well known to many scholars in Canada. The opportunity to visit Institute for the Study of Japanese Folk Culture is a great asset for me. As a matter of fact, my supervisor, professor Namlin Hur, was one of the researchers in this center approximately 20 years ago. Without this connection, I would not have a chance to meet scholars and approach to historical documents in this center. When it came to the documents, the most important one was books on Japanese policies in Korea because it is very difficult to find the original books in Canada.

Moreover, the library of Kanagawa University is treasure trove of Japanese modern history. It has collected a bunch of historical, political, and economic books concerning East Asia. To be specific, the works for international relations between Korea and Japan also occupies enormous space in the library. Among them, the historical documents, such as the Documents Related to Terauchi Masatake (寺内正毅関係文書) and the Documents of Saito Makoto (齋藤実文書) are very difficult to obtain in Canada. In this situation, it was very pleasing to read them in person. As a matter of fact, the librarians of the Asian Library at UBC have made a full effort to collect references and historical data related to modern Japanese history. Nevertheless, they cannot cover the entire research attainments outside Canada. Therefore, the sug-

gestion and request of researchers are very crucial in administering this library. The list that I made in Japan can make a contribution to enriching the references in this library.

In historiography, both paper work and field work are very important. Without the field trip, scholars just understand their research subjects superficially. In order to understand Japan, it is crucial to visit historical sites in Japan. Thus, I made time for visiting Tokyo in spite of my busy schedule. In fact, there are a lot of historical sites related to modern history of Japan in this city. For example, the Imperial Palace (皇居) is a place in which major decisions were made by the Emperor and prominent politicians. In addition, the issue of Yasukuni Shrine (靖国神社) is a hot potato in the relationship between Japan and the rest of East Asian states. If we do not understand the thought of the Right Wing in Japan, it is impossible to say that we are aware of Japanese society. The visit to the shrine is rare chance to understand the group of people. Moreover, Japan academia has gained benefit from the world-famous archives. The Diplomatic Record Office of the Ministry of Foreign Affairs of Japan (外務省外務史料館) and the National Archives of Japan (国立公文書館) are the typical examples of excellent archives in Japan. By visiting these two places, I was able to gain knowledge about their system and structure.

Definitely, the visit to Research Center for Nonwritten Cultural Materials and Institute for the Study of Japanese Folk Culture was a great fortune personally. I could approach to the original historical data and historical sites through this research trip. The cooperation and mutual exchange between Kanagawa University and UBC will be beneficial to each other's studies.

